

周布小建設予定地内埋蔵文化財 (森ヶ曾根古墳)発掘調査報告書

昭和 61 年 3 月

浜田市教育委員会

例　　言

1. 本書は、浜田市教育委員会が浜田市立周布小学校移転計画に伴い、昭和60年において実施した鶴石地区（移転予定地）発掘調査の報告書である。

2. 調査は次のような組織で実施した。

調査主体　　浜田市教育委員会　教育長　半田　淨

事務局　　浜田市教育委員会　社会教育課

　　社会教育課長　横田　勤

　　社会教育係長　竹中弘忠

　　主　　事　向田　薫

発掘担当者　　島根県文化財保護指導委員　桑原詔一

調査員　　“　　的場幸雄

川口幸子、新谷勝幸（7月10日まで）

調査指導　　島根県教育庁文化課　主事　西尾克己

調査協力　　島根県教育庁文化課　文化財保護主事　川原和人

八雲村教育委員会　主事　宮本徳昭

近藤哲夫、手嶌弘明（島根大学学生）、後藤和正（別府大学学生）

作業員　　岩本昭二、桑原彰、佐々木隆、佐々木幸恵、田中敏夫、中田ミチ子
的場君子、浜田博子、星根本サクエ

3. 図面の作成は、川口が行ったが、次にあげる図面は諸氏の協力をいただいた。記して感謝する。第5図A-A'トレンチの一部、近藤哲夫氏、手嶌弘明氏、第11図の一部・第24図　川原和人氏。なお、第28・29図は新谷が作成した。

4. 遺構及び遺物の写真撮影は桑原彰が行った。

5. 遺物の実測・図面の作成は川口が行った。ただし第30・31図は新谷が行った。

6. 本書の編集・執筆は桑原の指導のもとに、川原和人氏の協力を得て川口が行った。

ただし、調査に至る経過は向田が担当した。

7. 本調査には、地主佐々木健一、佐々木寧、原出保市の各氏、また、遺物整理・報告書作成の過程においては、浜田市郷土資料館の多方面にわたるご協力をいただいたことを記し謝意にかえる。

8. 図面に付した方位は、すべて調査時の磁北を示している。

目 次

I 森ヶ曾根古墳の位置と周辺の歴史的環境	1
II 調査に至る経過	3
III 調査概要	4
IV A地区（森ヶ曾根古墳）	5
調査概要	5
遺構について	7
遺物について	15
結語	33
V B地区	35
VI C地区	37
VII D地区	40
VIII E地区	42

図 版

第1図 森ヶ曾根古墳の位置と周辺の遺跡	1
第2図 周布小学校建設に伴う造成予定地内の発掘調査実施地区	4
第3図 森ヶ曾根古墳発掘前地形測量図	5
第4図 森ヶ曾根古墳残丘検出後地形測量図	8
第5図 森ヶ曾根古墳壇丘断面図及び壇丘東側崖見透し図	9
第6図 第7図における部分的断面図	10
第7図 森ヶ曾根古墳地山検出後地形測量図	11
第8図 石室及び閉塞石実測図	12
第9図 石室断面図	13
第10図 掘り方及び根石抜き取り跡図	14
第11図 石室内遺物出土状況図	15
第12図 石室内遺物出土状況図（部分）	16
第13図 石室内出土土器実測図（1）	18

第14図 石室内出土土器実測図（Ⅱ）	19
第15図 石室内出土土器実測図（Ⅲ）	20
第16図 石室外出土土器実測図（Ⅳ）	21
第17図 石室外出土土器実測図	22
第18図 鉄器実測図	28
第19図 耳環・勾玉実測図	29
第20図 弥生式土器出土状況図	30
第21図 弥生式土器実測図	30
第22図 石器実測図	32
第23図 背玉実測図	32
第24図 B地区出土須恵器実測図	35
第25図 B地区平面図及び土層断面図	36
第26図 C地区平面図	38
第27図 C地区土層断面表	39
第28図 D地区平面図及び土層断面図	41
第29図 E地区平面図及び土層断面図	43

写 真

I 森ヶ曾根古墳の位置と周辺の歴史的環境

森ヶ曾根古墳(1)は、島根県浜田市治和町775番地(俗称森ヶ曾根)に所在し、周布川河口にはど近い左岸、標高40mの低丘陵上の周布平野を一望に見渡すことのできる地点である。周布平野は、中岡山地大佐山附近に源を発する一級河川・周布川の堆積作用による沖積平野で、北・西方向は日本海に臨む。山地が海まで迫る例が多い石見地方において益田平野・大田平野に次ぐ面積を持った数少ない平野の1つに数えられている。古墳時代を中心とする数多くの遺跡が知られているが、精査されていないため、今後なお多数の遺跡の発見が期待されているところでもある。

さて、現時点で確認されている古墳周辺の遺跡に関して若干説明を加えたい。

縄文時代の遺跡は、昭和58年に発掘調査が実施された日脚遺跡②から、早期の土括群検出が報告されている他、治和町坂辻から石斧が単独出土している程度で、性格の明確なまとまった遺跡は確認されていない。

弥生時代の遺跡では、本古墳の北方約200mに位置する鶴石遺跡(2ヶ所)が代表的である。昭和48年に発掘調査が実施され、前～中期を中心とする多量の遺物を伴った、土括墓状遺構



第1図 須ヶ曾根古墳の位置と周辺の遺跡

- 1.森ヶ曾根古墳及び今回の調査実施地域 2.鶴石遺跡 3.鶴石2号墳 4.鶴石1号墳
5.歳地宅後古墳 6.小西ヶ丘古墳 7.周布古墳 8.めんぐろ古墳 9.沃田寺山古墳
10.鈴居古墳 11.山脚古墳 12.日脚遺跡 13.猿原山古墳群 14.上・内田後面横穴

32基が検出された。今回、この鈎石遺跡との関連を考慮して、鈎石遺跡と極近い丘陵上平坦面の2地点（第2図D・E）も発掘調査を行ったが、後述のとおり遺跡・遺物は検出できなかった。しかし、A地区森ヶ曾根古墳墳丘の中から後期の土器が出土した。

古墳時代に入ると確認遺跡数は増加するが、前期のものは知られていない。

中期になると、石見地方第3番目の規模を誇る周布古墳⁽⁷⁾が築造されている。周布平野を一望に見渡す台地上に位置する、全長約67mの葺石・埴輪を持った前方後円墳である。現在は国指定の史跡となっているが、未調査のため内部構造・副葬品等に関しては明らかでなく、詳細は不明の点が多い。しかし、単に規模だけから考えても、当時この地に強大な勢力が存在していたことが窺える。

後期初頭には、周布古墳の北方100mの地点に、めんぐろ古墳⁽⁸⁾が築造されている。現在は畠地化のため消滅している。正式な調査が実施されていないため、墳形・規模等は不明であるが、内部構造は陣壁石を持った両袖型横穴式石室と報告されている。副葬品は実際に豊富で、彷彿鏡・鈴鉗・直刀・馬具一式・須恵器等があり、この地域ではあまり類例を見ない貴重品も含まれていた。

後期中葉以降、全国的傾向ではあるが、この周布平野周辺においても小古墳が急増した。今回発掘調査を行った森ヶ曾根古墳をはじめ、鈎石1・2号墳（4.3）、藏地宅後古墳⁽⁵⁾、小西ヶ丘古墳⁽⁶⁾、沃田寺山古墳⁽⁹⁾、鈴居古墳⁽¹⁰⁾、日脚古墳⁽¹¹⁾、日脚遺跡⁽¹²⁾内の4基の古墳、塚原山古墳群⁽¹³⁾等である。わずかに調査された例として、日脚遺跡内の4基の古墳があり、片袖型・両袖型兩タイプの横穴式石室が報告されている。また、藏地宅後古墳は半壌状態にあるが、珍しい石棺型石室が観察できる。しかし、これらの古墳は、大部分が消滅もしくは半壌状態で、副葬品も散逸したものが多く、その全容が窺えるものはないと言ってよい。周布平野の後期古墳は如何なる地方色を呈し、如何なる地域との如何なる関連が見られるのか——今となっては非常に困難な問題となってしまったが、今後の調査・研究に期待したいところである。

奈良時代に入ると、浜田市東よりの下府町・国分町附近に国府や国分寺等が造営され、石見地方の一大中心地が形成された。周布平野は、そこから約10km離れた所であり、広い可耕面積を持った所でもある。その後も人間の良好な生活面として、後世に引き継がれることと思われる。

II 調査に至る経過

今回の調査は、浜田市立周布小学校改築事業に伴い建設予定地内（19,000m²）の遺跡有無確認のため、浜田市教育委員会が昭和59年3月5日に島根県文化財保護指導委員、桑原詔一・的場幸雄の両氏に依頼して分布調査を実施したところ、遺跡（古墳）の存在が確認されたことに端を発する。このため、昭和59年3月13日付け、浜教社第389号で、文化庁長官宛遺跡発見通知書を提出した。その後、昭和59年3月31日付け、島教文第103号で島根県教育委員会教育長（文化課）より工事着手前に発掘調査を実施する旨指導があった。

当市には、埋蔵文化財を発掘調査する専門職員が配置されていないため、調査員の確保については、県教委に対する調査員の派遣依頼、市独自での専門職員の配置について努力したが実現には至らなかった。

そこで、桑原詔一・的場幸雄の両氏に公務ご多忙の所、無理をお願いして調査にご協力願った。昭和60年2月9日に関係者の打ち合せ会を行い、昭和60年2月16日より調査にとりかかった。調査は、その後、史跡石見国分寺跡現状変更（経蔵改築）に伴う発掘調査をはさんで、昭和60年8月31日まで実施した。

III 調査概要

発掘調査は、周布小学校建設に伴う造成予定地内で、遺跡発見の可能性が高い5ヶ所（第2図A・B・C・D・E）について実施した。

5ヶ所を選んだ理由は次のとおりである。

A地区 - 露出石材の状況と須恵器破片の出土で、後期古墳の存在が確実であった。

B・C地区 - 巨石を含む集石があり、何らかの遺構が期待された。

D・E地区 - 弥生時代前期を中心とする鰐石遺跡から直線距離にして約100m離れた丘陵上平坦地面に位置し、鰐石との関連遺跡が期待された。

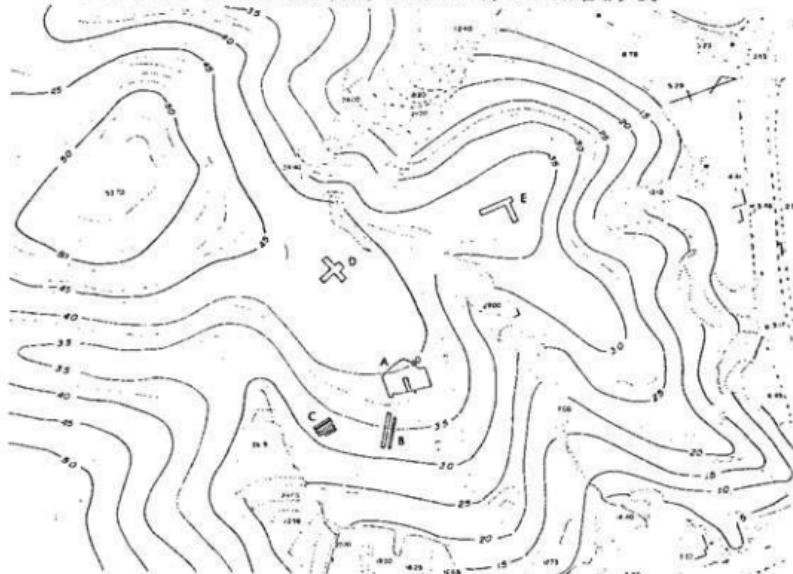
調査は、D・E地区→B・C地区→A地区の順に行った。期間は次のとおりである。

D・E地区 - 昭和60年2月16日～2月23日、実質7日間

B・C地区 - 昭和60年4月27日～5月5日、実質8日間

A地区 - 昭和60年5月3日～8月31日（3期間に分けて実施）、実質55日間

なお、各地区ごとの調査概要是後述することにして、ここでは省略する。



第2図 周布小学校建設に伴う造成予定地内の発掘調査実施地区 (S-200)

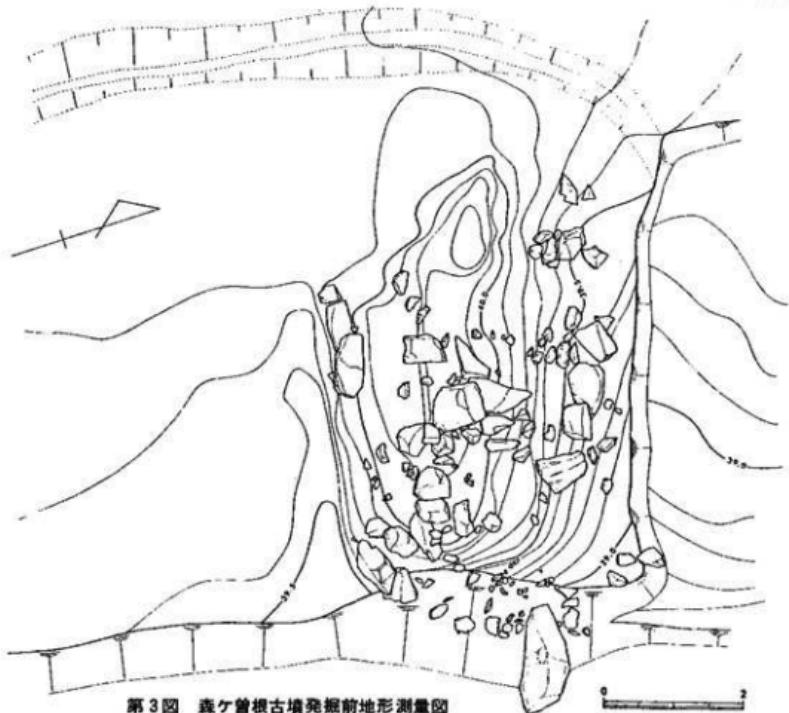
IV A地区（森ヶ曾根古墳）

調査概要

A地区の発掘前の状況は、松や雜木がうっそうと生い茂り腐食土が厚く堆積する林であった。A地区周辺から西方にかけては、時期は不明であるが畠地化の痕跡が残っており、本古墳も東側崖、北側小崖によって墳丘が削り取られ、耕作面とされていたようである。墳丘はほとんど平坦地化されていた。

立木を伐採し腐食土を除去したところ（第3図）、石室上面のみ小高く残っていたが、石材が散乱しており、側石の一部は露出していた。天井石は既に散失しており、その形状は旧状とは程遠いと推測された。

まず、露出している御石とボーリングステッキによる探査で、横穴式石室の方向を推定



第3図 森ヶ曾根古墳発掘前地形測量図

し、主軸線とその直交軸線を求めて幅50cmのトレンチを設定した。土層を観察すると、石室の南と西の2トレンチで残丘と周溝が検出でき、およその墳丘規模を知ることができた。

トレンチの土層を参考に残丘を全面的に検出していくと、2つのトレンチで検出された周溝は弧を描いてつながり、円墳であることが確認された。

その作業に並行して、石室内流入土の除去を行った。石室内には、天井石や側石に使用された巨大な石が幾重にも落ち込んでおり、上部土層観察は不可能であった。途中、床面より30~50cm浮いた高さで完形の須恵器3点、完形の鉄錐1点、比較的まとまった須恵器片多数が出土して、内部はかなり荒らされているのではと心配された。しかし、床面近くからは閉塞石の一部や多量の遺物が出土し、その残存状況は半壊状態の石室内遺物にしては極めて良好であった。位置を確認しながらこれを取り上げ、床面の検出を行った。

石室は、上半分を失っていたが根石はほぼ残存していた。多少問題点を残しながらも、無袖型横穴式石室であると確認できた。

次に残丘を除去し、原地形地山面を求めた。その主たる目的は、原地形の傾きと石室との関係を知るためにあったが、思いもかけず墳丘下から土壇の一部やピットが検出された。土壇底面から石皿や磨石等が出土し、ピットの1つからは弥生式土器も出土した。古墳築造以前の生活面の存在が明らかとなつたが、古墳築造に当つてその大半は破壊されていた。

また、古墳東側崖断面のところどころに集石があり、その中に比較的大きい石も含まれていたため、崖を少し削って様子を見た。その結果、これは畠地化された折に設けられた施設の一部の残骸であろうと判断された。

以上の過程を終えた段階の昭和60年8月3日、現地説明会を開催した。

説明会終了後、最後に根石を除去して振り方や根石の埋まり方を観察し、発掘調査を無事終了した。

遺構について

墳丘

墳丘はほとんど削平され平坦地化していたが、主軸線上と主軸直交軸線上に幅50cmの土層観察用トレンチを入れたところ、わずかな残丘層が検出できた。

主軸直交軸線上のトレンチA-A'（第5図）の石室から左側では、上より薄褐色砂質土（5）、薄橙褐色砂質土（6）、そして周溝の灰褐色砂質土（7）の3層が見られた。

薄褐色砂質土層は、耕作土として搅乱されており、石室内出土須恵器と接合する破片も含め須恵器小破片約120点、中世以降の糸切り底を持つ土師器皿破片1点、江戸時代以降の磁器破片10数点、瓦破片2点を出土した。

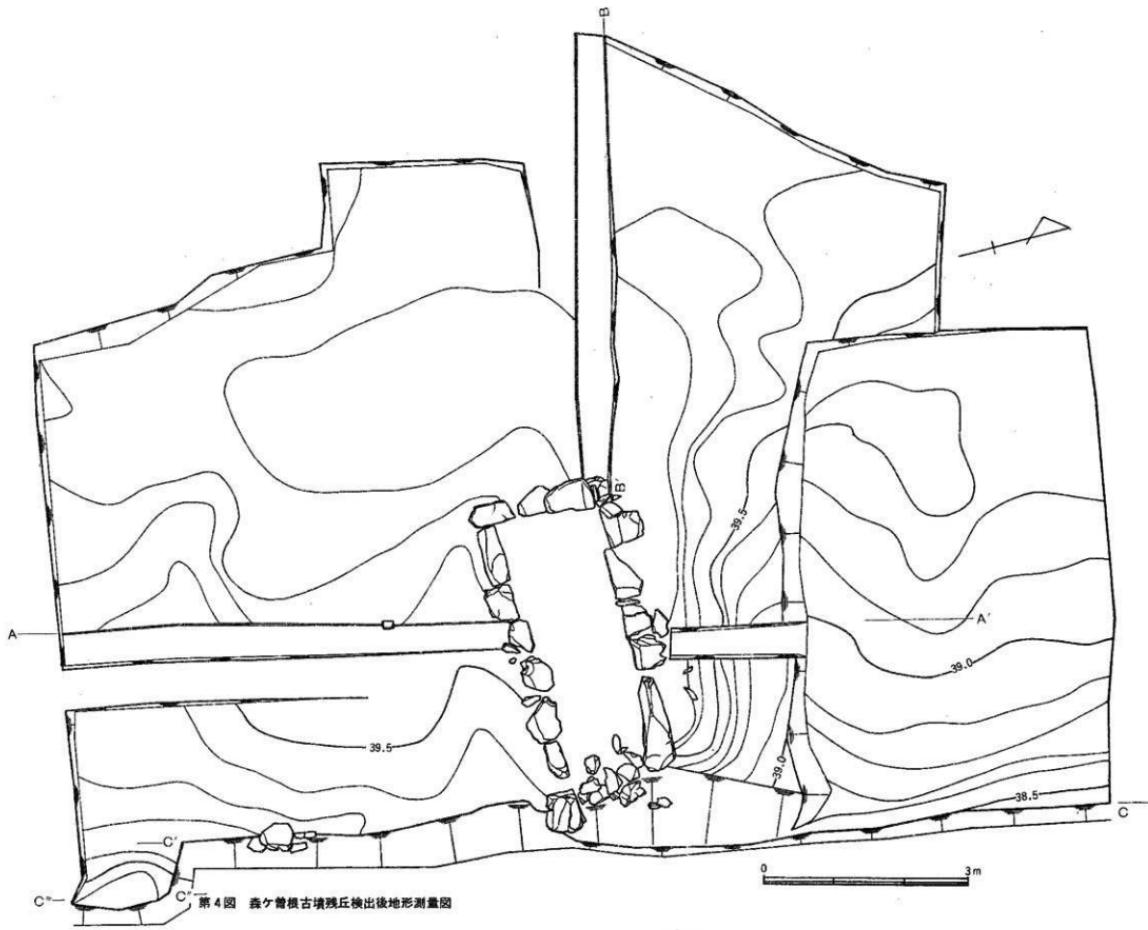
薄橙褐色砂質土層は、周溝層との切り合い関係から古墳築造以前の自然堆積土層と考えられる。周溝を除くA地区南半面に薄い層を成していた。石室南部で磨石や石皿を出土した土壤の中もこの層で埋まっており、いつかこの地の生活面が終了した段階から堆積が始まったものようである。

周溝の層は、墳丘の西から南にかけて検出された。幅は広いところで1.1m、深さは深いところで0.3mであるが、南へ行くに従って広く浅くなり、ついには消滅している。その形状から、本墳が円墳であったことが確認できた。

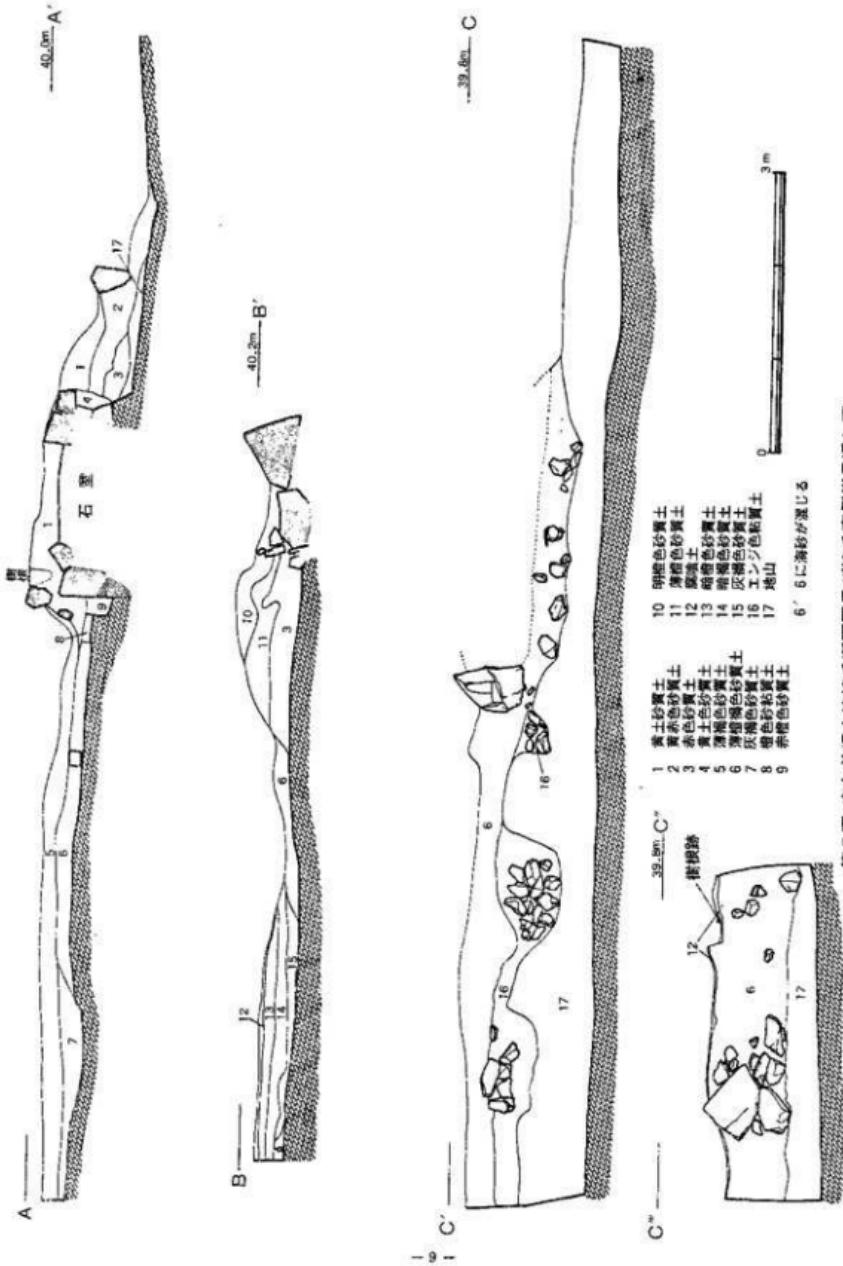
次にトレンチA-A'の石室から右側であるが、上より黄色砂質土（1）、赤黄色砂質土（2）、赤色砂質土（3）の3層が見られた。掘り方（4）との切り合い関係から全て残丘層と考えられる。遺物はいずれの層からも出土しなかった。残丘範囲がわずかであるため、墳丘の広がりや周溝の検出はできなかった。

主軸線上のトレンチB-B'の詳細は省きたい。ただ、周溝は浅く幅広くわずかに残っており、このトレンチより北側ではほとんど消滅していた。しかし、その約2m北の周溝延長面上には、須恵器大型甕（第17図3）の肩部破片がまとめて出土した。なお、この甕と同一個体破片が、A-A'トレンチ付近の周溝層からも10数点出土したことも付け加えておく。

以上記してきたように、墳丘の残存状況は非常に悪い。正確な墳丘規模は不明だが、南北方向の石室と周溝の距離から墳丘を復原すると、周溝の内側で直径約10mを測る円墳になる。全周に周溝が巡っていたとすれば、その外側で直径約12mの円墳となろう。



第4図 古ケ曾根古墳残丘検出後地形測量図



第5圖 森ヶ磐根古墳堆丘断面及び埴丘東側壁見透し図

墳丘下の遺構

墳丘を除去し地山面を検出したところ、ピット5つ（第7図P1～5）と土壌状遺構が検出された。個々のピットの観察は第1表に示す。

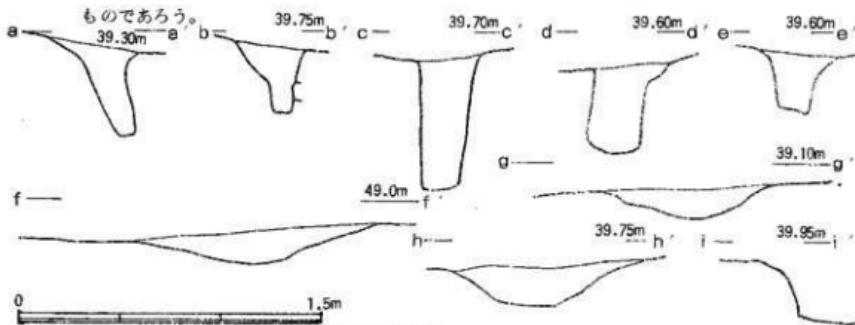
	上部直径	深さ	底直径	形 状	出土遺物	埋 土
P 1	4.0.0	3.0.0	1.5.0	やや底が狭くなる	石皿（第22図4）	橙褐色砂質土
P 2	3.0.0	4.4.0	2.5.0	すんどうな丸底	なし	橙褐色砂質土
P 3	3.0.0	6.5.0	1.9.0	すんどうで深い	弥生式土器多数 (第20図)	淡片を多く含む橙褐色砂質土
P 4	3.5.0	3.1.0	1.0.0	途中で段がつき 狭くなる	なし	橙褐色砂質土
P 5	4.0.0	4.3.0	9.0	叢めに入っている	なし	橙褐色砂質土

第1表 ピット観察表 (単位: cm)

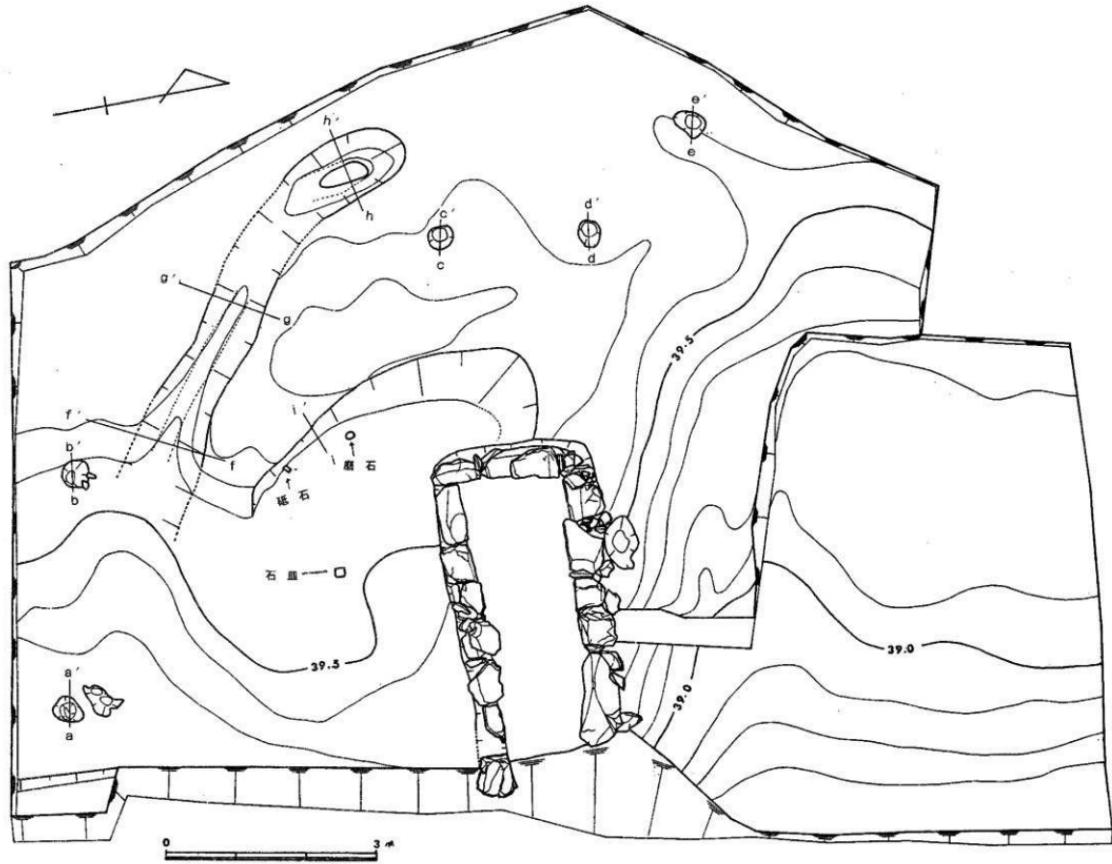
土壌状遺構は、石室の南西方向にかけて壁面がわずかに残っていた。その底のカーブから規徴を推定するなら正円形として約5cmになろう。

床面直上からは砾石・礫石・石皿（第22図1・3・5）・管玉（第23図）が出土して、住居址の可能性が高いが、これに伴う柱穴が見当らず、現時点での断定は避けたい。土器が出土していないため時期は不明であるが、埋土はところどころに炭片を含む橙褐色砂質土で、P 3と近似しており、弥生時代後期ではないかと考えられる。ただP 3の埋土の方がかなり炭片を多く含むため問題が残る。

さて、墳丘東側崖断面に見られた集石（第5図）であるが、これは崖断面の表面的なものであって、その裏面のところどころからは薄い赤砂の層が検出された。おそらく畑地化を行った際に、崖の土崩れを防ぐために築いた石垣がところどころに残骸をとどめている

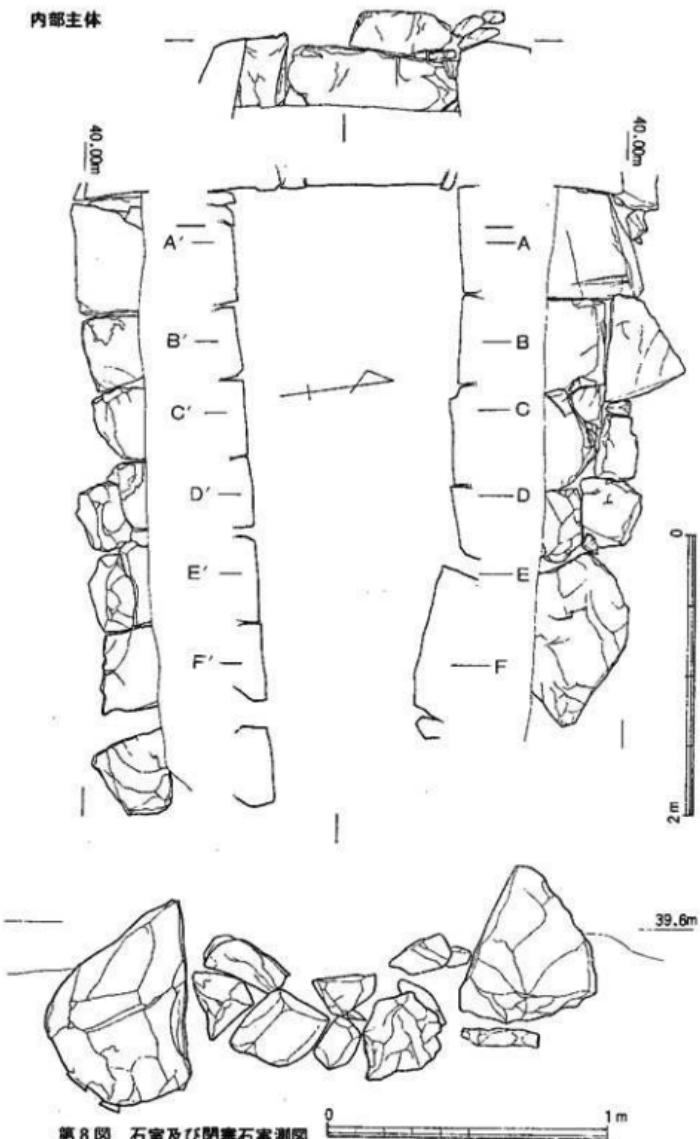


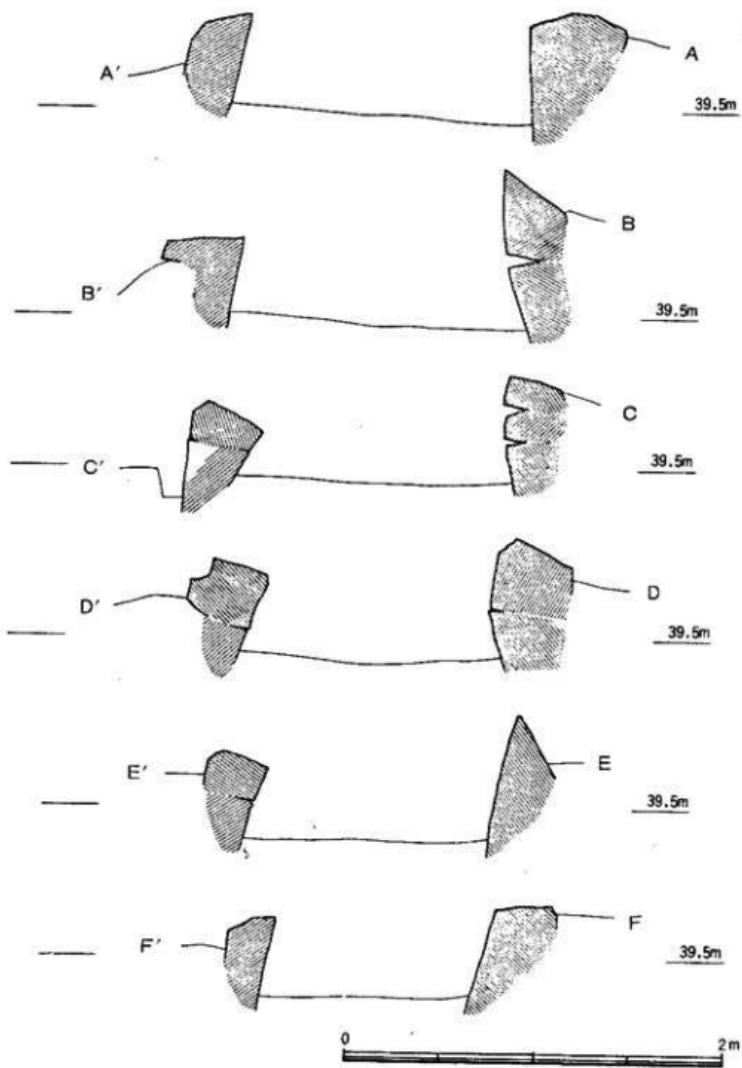
第6図 第7図における部分的断面図



第7図 地山検出後地形測量図

内部主体





第9図 石室断面図

内部主体は横穴式石室である。

入口は閉塞石をわずかに残して、東側に向って開口していた。周布平野を一望に見渡せる非常に景観の良い方向である。

後世の畠地化により石室上部は完全に破壊、散逸してしまったが、幸いにも根石はほぼ完存しており、場所によっては2段目の石材迄が残っていた。

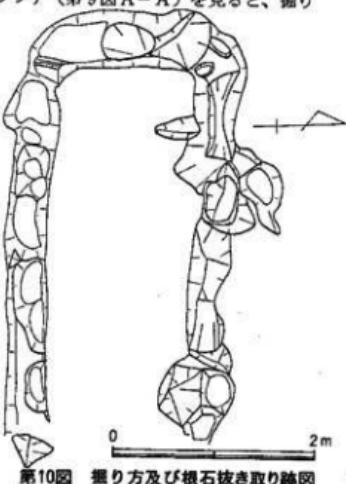
石室の規模は、全長440m、奥幅155m、入口幅1.04mを測る。

奥幅に比べて入口幅が約2/3と狭くなっている。これは入口の右側石1つが内傾しているためで、それより奥側は幅約155mと一定しており、長方形プランを呈している。この内傾した右側石は、石材抜き取り後(第10図)を見ると左片袖型の袖石的性格を色濃く示しており、無袖型と断言することに一抹の疑問を生じさせる。しかし、重要なポイントとも言えるその手前の根石が崖によって切り落とされ、その位置・傾きが不明になっている現時点では、はっきりした結論を導くことは困難と思われる。以上のように多少の問題点は残るが、実際に石室を形成していた右側石は、角を有することなく一連に並んでいたため、ここでは左片袖型が退化した無袖型横穴式石室であると解釈しておきたい。

床面は地山面である。敷石等の施設は見られない。奥側よりも入口を低く、また奥側に行くほど右側を低くすることによって排水を考えたものと思われる。

さて、石室築造方法であるが、土層観察用のトレンチ(第9図A-A')を見ると、掘り方は左側石側では第1盛り土から地山にかけて掘られているのに対し、右側石側では盛り土内におさまり地山直上が底面になっている。原地形地山面は南西に高く北東に低いため、まずある程度の盛り土を行い、全体の高さをおよそ合わせた後に掘り方を掘ったと考えられる。

尚、根石は尖った方を下に向けて、掘り方底面から深いところで約30cm下迄埋められていた。掘り方を掘った後、さらに根石の底の形に合わせて掘り込みを行ったことが窺われる。



第10図 挖り方及び根石抜き取り跡図

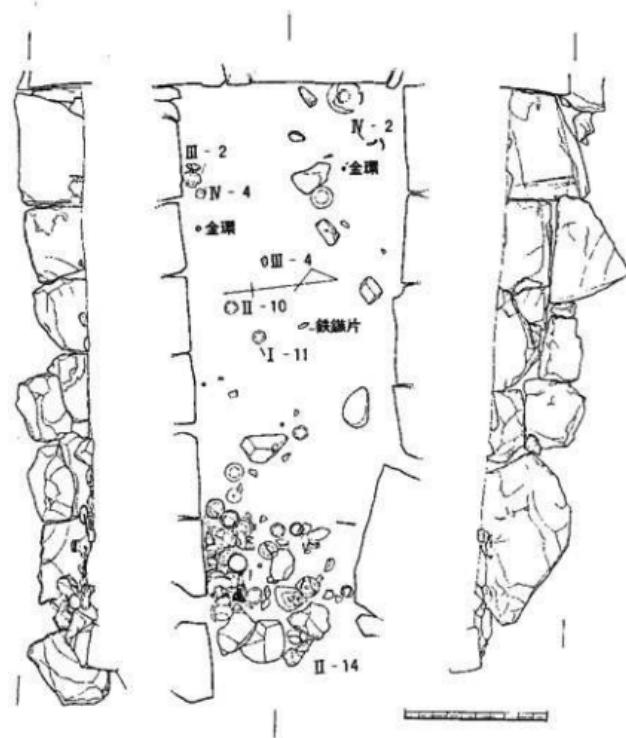
遺物

石室内出土遺物について

出土状況

石室内からは、須恵器34点以上・土師器2点・鐵鏡片多数・鐵刀子片3点・鐵斧1点・耳環5点・勾玉1点と非常に多數の遺物が出土した。しかし、何處かの追葬や何らかの理由により、ほとんどが原位置を動かされた状態であった。

石室入口附近左側石よりには、土器類がごちゃごちゃと集められていた（以下、土器集



第11図 石室内遺物出土状況図 (番号は土器実測図と照合する)

合部)が奥側には蓋坏の环と上下逆転した蓋が積み重ねられており、前側には蓋坏以外の器種が積み重ねられていた。これは何度かの追葬の際、それ以前に石室内に置かれていた土器を整然したものと考えられる。型式の古いものほど下方に位置していた(第3図)。

小羣蓋坏は石室中央部から前部にかけて散乱していたが、上下逆転または床面から浮いた状態で出土した。蓋は上下逆転し土器集合部最上段に積まれているものもあった。

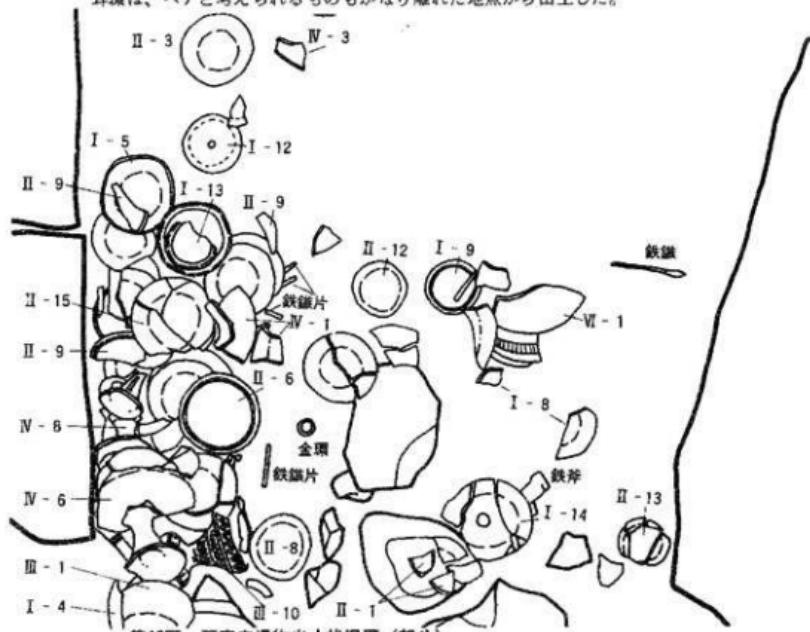
一番新しい形式と思われる須恵器は石室の最も入口近くから出土したが、坏1点と長頸壺は土器集合部最上段に載せられており、原位置は保っていなかった。

石室奥側からは脚付短頸壺やコップ状器が出土したが床面よりやや浮いていた。

ただ、奥壁に接して出土した土師器の壺のみは床面直上に立っており、原位置を保つ唯一の遺物と考えられる。

鉄鏃は、尖根鏃が入口周辺及び土器集合部の下方から出土したのに対し、広根鏃2点がやや奥部から出土した。本古墳において、広根鏃の後出を意味しているのかもしれない。

耳環は、ペアと考えられるものもかなり離れた地点から出土した。



第12図 石室内遺物出土状況図(部分)

土器

須恵器

石室内からは多数・多器種の須恵器（第13～17図）が出土したが、その内訳は全体の形状がほぼ復原できるものを数えると、蓋壺の壺蓋13・壺身17・有蓋高壺の蓋1・無蓋高壺2・短頸壺2・脚付短頸壺2・長頸壺1・瓶1・甕1・提瓶2・器台1・コップ状器1となる。他に小破片のみ出土したものも相当数あり、実際に副葬された数は前述の数より相当多かったことを示している。

また、これらは非常に年代幅が広く、多型式でもある。蓋壺の壺蓋を例に挙げると、外面中央やや下よりに稜がつくもの（第13図1）から、扁平な宝珠状つまみを持ち内面のかえりが消えているもの（第13図14）迄が出土している。これは何度かの追葬の存在を、土器の形式面から裏付けていると言ってよい。

そこで、地方生産がかなり普及しているこの時期の須恵器を他地域の編年で検討することには問題があるとしても、当方の編年が確立されていない現在、出土須恵器を陶器編年に当てはめてみた。すると出土須恵器は下記のようにはば3時期に分かれた。

- II型式2段階
- II型式4段階～III型式1段階
- IV型式1段階

のことから、II型式2段階の時に初葬が行われ、その後II型式4段階～III型式1段階の間と、IV型式1段階の間、2期間にわたって追葬が行われたと考えられる。ただし、

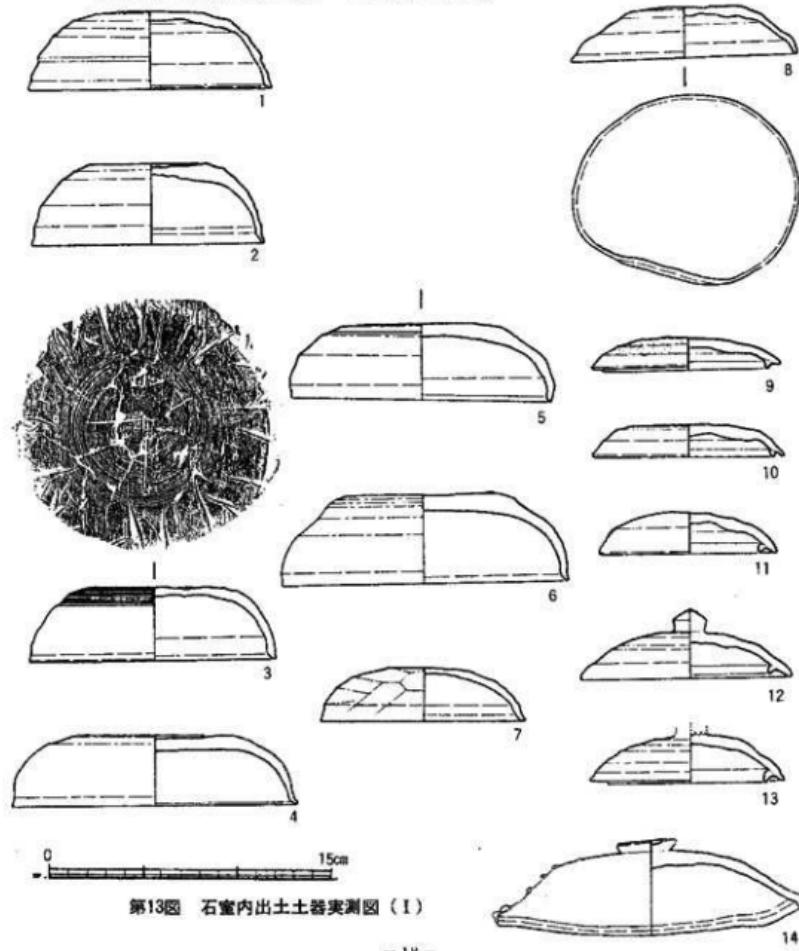
	第12図	第13図	第14図	第15図	第16図
II型式2段階	①	①			
II型式3段階					
II型式4段階	②⑧	②	⑩		
II型式5段階	④⑤⑥	③④⑤⑥⑦	⑤⑥⑨	①③	
II型式6段階	⑦⑧	⑧⑨			
III型式1段階	⑫⑬	⑩⑪⑫⑬			
III型式2段階					
III型式3段階					
IV型式1段階	⑭	⑭⑮		⑯	

第2表 陶器編年とA地区出土須恵器の位置づけ

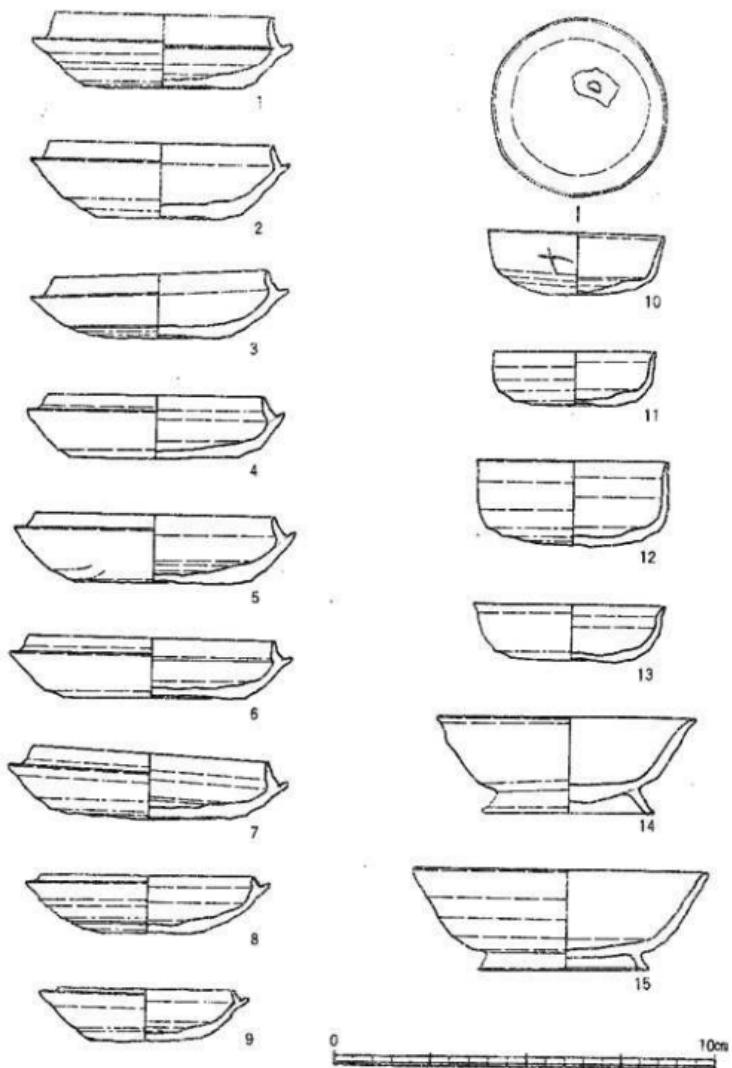
これは1期間に1度の追葬ということではない。II型式4段階～III型式1段階の間は、年代的に幅広く出土土器数も多いため、数度の追葬が行われた可能性が高い。

現時点で言えることは、II型式2段階の時期つまり後期中葉頃に初葬が行われ、その後2回以上の追葬が行われた。そして一番最後の追葬がIV型式1段階の時期つまり終末期に行われたということであろうか。

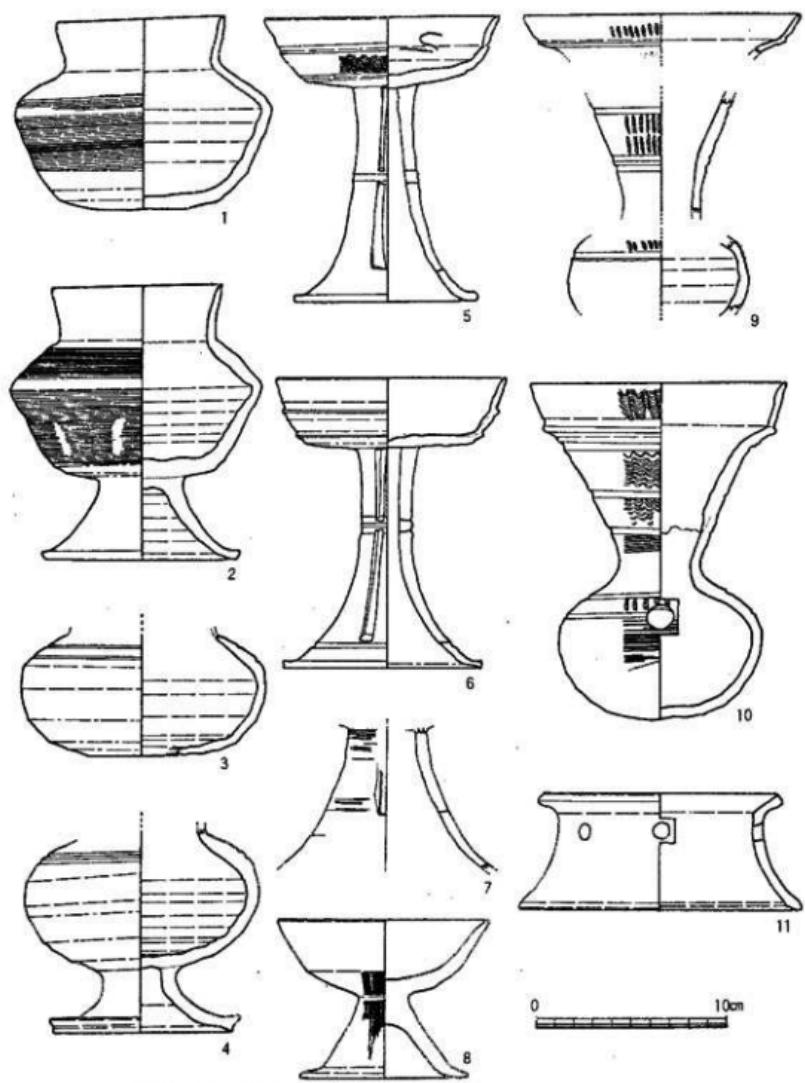
各個体別の観察は後貞の表2～6を参照されたい。



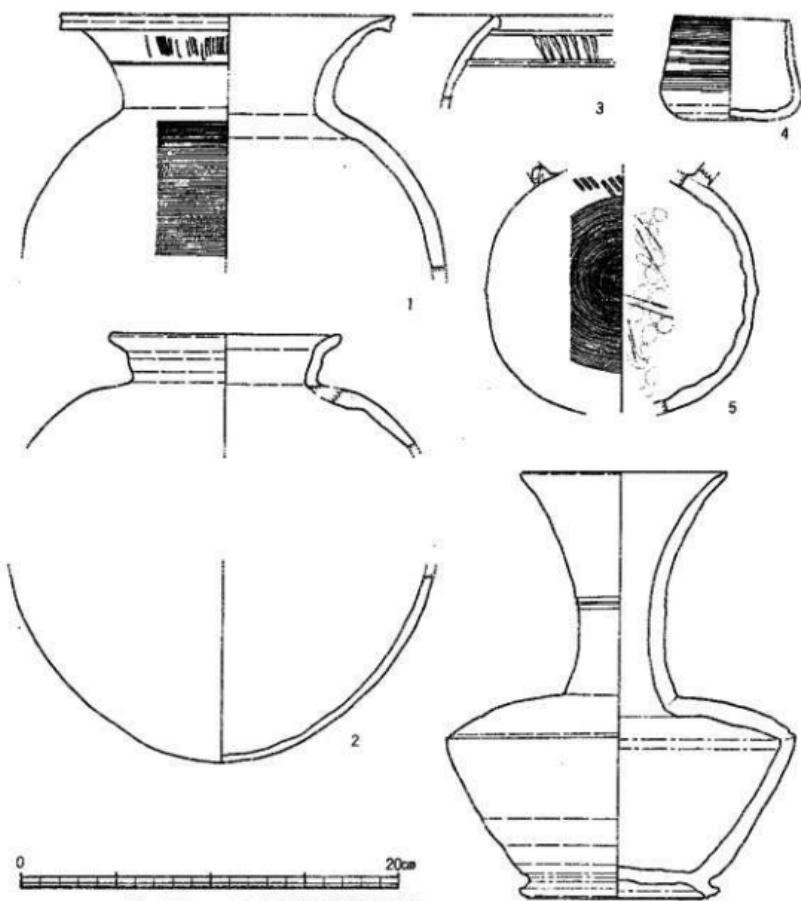
第13図 石室内出土土器実測図(1)



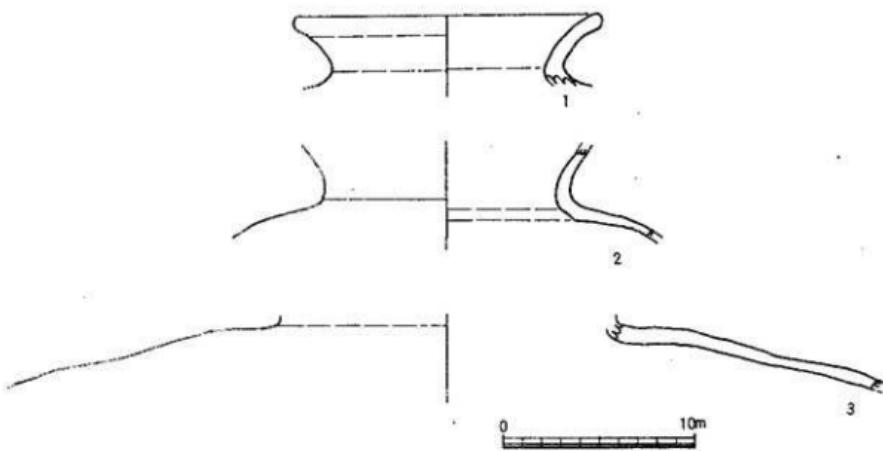
第14図 石室内出土土器実測図 (II)



第15図 石室内出土土器実測図（Ⅲ）



第16図 石室内出土土器実測図 (IV)



第17図 石室外出土土器実測図

留連		法量 (cm)	輪	土	燒成	色	調	ろくろ	調	輪	外觀型態の中央よりやや下に筋が つく	参考
1	薺	口径 1.30 (暫定)	器高 4.2	石英微粒を少量 含む	や や 良	青青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、一定方向のカキメ	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	左回転へラ削り後、有藝術的の美である可能性が高い。 ヘラ記「メ」が描かれている。	ほぼ光形
2	薺	口径 1.24	器高 4.3	石英微粒を少 量含む	や や 良	青青灰色	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、一定方向のカキメ	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
3	薺	口径 1.31	器高 3.93	石英微粒を少 量含む	並	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、一定方向のカキメ	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	左回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
4	薺	口径 1.52	器高 3.8	石英微粒を少 量含む	混 立	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、一定方向のカキメ	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
5	薺	口径 1.385	器高 4.3	石英微粒を多く 含む	立	灰 褐色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
6	薺	口径 1.52	器高 4.75	石英微粒を多 く含む	混 立	赤 褐色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」はナデ	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
7	薺	口径 1.09	器高 2.9	石英微粒を少 量含む	混 立	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
8	薺	口径 2.56	器高 2.8	0.5 mm程度の 石英微粒を特に 含む	良 良	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
9	薺	口径 1.09	器高 2.8	0.5 mm程度の 石英微粒を特に 含む	良 良	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
10	薺	口径 0.95	器高 2.8	0.5 mm程度の 石英微粒を多く含 む	良 良	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
11	薺	口径 1.09	器高 2.8	0.5 mm程度の 石英微粒を多く 含む	良 良	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
12	薺	口径 1.09	器高 2.8	0.5 mm程度の 石英微粒を多く 含む	良 良	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
13	薺	口径 1.09	器高 2.8	0.5 mm程度の 石英微粒を多く 含む	良 良	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形
14	薺	口径 1.09	器高 2.8	0.5 mm程度の 石英微粒を多く 含む	良 良	青灰色	左回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転	ナデ 回転 ヘラ削り後、ナデ 回転へラ切り後、「メ」	右回転へラ削り後、「メ」が描かれている。	ほぼ光形

(ただし全て須恵器である)

密度	法量 (cm)	地成土	色	調	ろくろ	調		型	考
						右回板	左回板		
1 粘	口 保径 1.55 器高 4.0	石英砂質と黒色 砂を少含む 含む	中 や 黒	調灰色	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後、一定方向のカキメ	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後、一定方向のカキメ	第12回1とペアか?
2 粘	口 保径 1.9 器高 4.0	石英砂質を少量 含む	や や 黒	調灰色	左回板	ナラ削り後、丁寧なナダ ヘラ削り後、一定方向のカキメ	右回板	ナラ削り後、丁寧なナダ ヘラ削り後、一定方向のカキメ	完形
3 打	口 保径 1.13 器高 3.7	石英砂質と黒色 砂を少含む 含む	や や や 黒	調灰色	左回板	ナラ削り後、丁寧なナダ ヘラ削り後、一定方向のカキメ	右回板	ナラ削り後、丁寧なナダ ヘラ削り後、一定方向のカキメ	光形
4 粘	口 保径 1.14 器高 3.6	石英砂質を多く 含む	や や 良 い	調灰色	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	完形
5 粘	口 保径 3.45 器高 4.85	石英砂質を少含 む	い い 良	調灰色	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後、一定方向のカキメ、さらに擦 とところるに軽い火がくれがあ る。	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	はぼ完形
6 粘	口 保径 3.7 器高 4.95	石英砂質を多く 含む	や や 良	調灰色	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	完形
7 粘	口 保径 1.24 器高 3.95	石英砂質を多く 含む	並 良	調灰色	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	光形
8 粘	口 保径 1.59 器高 3.11	石英砂質を多く 含む	良 い	調灰色	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	光形
9 粘	口 保径 1.10 器高 2.9	石英砂質と黒色 砂を多く含む 含む	良 い	調灰色	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	外周部にはヘラがよくあるヘラ斜 「ノリ」が見られる。底には上から放散 に買ったと記されている。
10 粘	口 保径 9.4 器高 3.45	石英砂質を少含 む	良 い	調灰色	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	はぼ完形
11 粘	口 保径 2.9 器高 3.05	石英砂質を常に 含む	良 い	調灰色	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	完形
12 粘	口 保径 10.1 器高 4.45	石英砂質を常に 含む	良 い	調灰色	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	光形
13 粘	口 保径 9.0~ 器高 3.05	石英砂質が多い 含む	良 好	黒灰色	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	はぼ完形
14 粘	口 保径 1.95 器高 9.1	石英砂質を常に 含む	や 良	調灰色	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	光形
15 粘	口 保径 1.56 器高 8.95	石英砂質を少含 む	良 い	調灰色	左回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	右回板	ナラ削り後、ナダ ヘラ削り後	はぼ完形

(ただし全て須恵器である)

第4表 石室出土土器觀察表(Ⅱ) 第14圖に對応

器種	法盤(d)	胎	土	焼成色	黒灰色 ⑩ ⑪	ろくろ	圓	整	備考	残存状況
1 ⑦ 煙頭蓋	口径 8.85 器高 10.3 底径 8.5	石英微粒を少量含む	良	黒灰色 ⑩ 薄灰色 ⑫	左回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	完形	完形
2 ⑧ 脚付短 脚付蓋	口径 9.0 器高 1.46 脚底径 1.05	石英微粒を少量含む	良	黒灰色 ⑩ 灰色 ⑬	左回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	完形	完形
3 ⑨ 煙頭蓋	口径 1.29 底径 5.9	石英微粒を多く含む	悪	黒灰色 ⑩ 紫色 ⑪	左回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	口縁文頸。底 ~脚部大部を欠 けた状態。	口縁文頸。底 ~脚部大部を欠 けた状態。
4 短脚蓋	脚底径 1.00	0.5 mm以下の石英微粒を多く含む	良	黒灰色 ⑩ エビ茶色 ⑪	左回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	口縁を欠損	口縁を欠損
5 高环	口径 1.25 器高 1.52	石英微粒を多く含む	良	黒灰色 ⑩ 海灰色 ⑪	右回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	脚部を欠損	脚部を欠損
6 高环	口径 1.22 脚底径 1.05	石英微粒を多く含む	良	黒灰色 ⑩ 灰色 ⑪	右回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	脚部を欠損	脚部を欠損
7 高环	口径 1.126 脚底径 8.95	石英微粒を常に含む	並	黒灰色 ⑩ 明褐色 ⑪	左回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	脚部を欠損	脚部を欠損
8 高环	口径 1.46(他) 脚部最大径 9.6(他)	直径 1 mm程度の石英微粒を少量含む	や 悪	黒灰色 ⑩ 薄灰色 ⑪	左回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	脚部を欠損	脚部を欠損
9 趾	口径 1.35 器高 1.80	石英微粒を常に含む	や 良	黒灰色 ⑩ 灰色 ⑪	右回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	脚部を欠損	脚部を欠損
10 趾	口径 1.29(他) 器高 6.25	石英微粒を少量含む	並	赤 茶灰色 ⑪ 黑色 ⑩	左回転	ナデ ⑭	ナデ ⑭	ナデ ⑭	脚部を欠損	脚部を欠損
11 器合	底径 14.9(他)			?	?	?	?	?	?	?

第5表 石窓内出土土器觀察表（III） 第15回に対応

ただし⑤は須恵器を示す。
④は土師器を示す。

器種	法 側 (cm)	輪	土	燒	成	色	調	整	備 考	残存状況
1 磁	口径 17.75 高 11.5	0.5 ~ 1 mmの 石英粒を少く含む	や 茶~黒灰色	や 茶~黒灰色	右回転	⑤ 口縁はナデ。輪部は同心円文タキメ のヘラ先で刺突文を施す。輪部はカキメ は逆手形で出土し 他の取り上げ不可。 口縁外側はヨコナデ。	⑤ 口縁はナデ。輪部は同心円文タキメ のヘラ先で刺突文を施す。輪部はカキメ は逆手形で出土し 他の取り上げ不可。 口縁外側はヨコナデ。	⑤ 口縁はナデ。輪部のみ 約1周	口縁~輪上部 の1周が残存	口縁~輪上部 の1周が残存
2 磁	口径 1.23 高 2.28 (焼付)	0.5 ~ 1 mmの 石英粒を多く含む	や 茶~黒灰色	や 茶~黒灰色	左回転	⑤ 口縁はナデ。沈線を2本施した間にヘラ先? で刺突文を施す。	⑤ ナデ。沈線を2本施した間にヘラ先? で刺突文を施す。	⑤ ナデ	口縁のみ 約1周	口縁のみ 約1周
3 磁	口径 6.1 高 5.5 底径 5.5	石英粒を多く含む	や 茶~黒灰色	や 茶~黒灰色	左回転	⑤ ナデ	⑤ ナデ	⑤ ナデ	口縁のみ 約1周	口縁のみ 約1周
4 コップ 状器	高 1.43 (指定)	石英粒を多く含む	や 茶~黒灰色	や 茶~黒灰色	右回転	⑤ ナデ	⑤ ナデ	⑤ ナデ	口縁のみ 約1周	口縁のみ 約1周
5 長瓶	口径 1.09 高 2.27 底径 1.05	0.5 ~ 1 mmの 石英粒を多く含む	や 茶~黒灰色	や 茶~黒灰色	左回転	⑤ ナデ	⑤ ナデ	⑤ ナデ	口縁のみ 約1周	口縁のみ 約1周
6 長瓶	口径 1.09 高 2.27 底径 1.05	0.5 ~ 1 mmの 石英粒を多く含む	や 茶~黒灰色	や 茶~黒灰色	左回転	⑤ ナデ	⑤ ナデ	⑤ ナデ	口縁のみ 約1周	口縁のみ 約1周

ただし ⑤は直轄器
⑥は土器器
を示す。

第6表 石室出土土器類素表 (IV)
—第16図に対応—

器種	法 側 (cm)	輪	土	燒	成	色	調	整	備 考	残存状況
1 磁		石英粒を多く含む	普通	黒灰色	黒灰色	⑤ 口縁はナデ。	⑤ ナデ	⑤ ナデ	口縁が約 1周	口縁が約 1周
2 磁		石英粒を多く含む	や 良	茶~黒灰色	茶~黒灰色	⑤ 口縁はナデ。輪部は平行波線状タキメ の後カキメ	⑤ 口縁はナデ。輪部は平行波線状タキメ の後カキメ	⑤ 口縁に直い部分はナデ。それより下は 同心円文タキメ。	口縁部分が約 1周	口縁部分が約 1周
3 磁		石英粒を少く含む	良	茶~黒灰色	茶~黒灰色	⑤ 口縁に直い部分はナデ。それより下は 同心円文タキメ。	⑤ 口縁に直い部分はナデ。それより下は 同心円文タキメ。	⑤ 口縁に直い部分はナデ。それより下は 同心円文タキメ。	口縁部分が約 1周	口縁部分が約 1周

第7表 石室外出土土器類素表 —第17図に対応—

鉄器

鐵完形品1点、鐵片17点、刀子片3点、小型斧1点が出土した。

全て鍛造品である。

鐵（第18図1～17）は、出土数が少ない割には形式の異なるものが多く。身部が9点確認された内鑿箭式5点（1～3・8・9）、三角形式1点（4）、五角形式1点（5）、斧箭式1点（6・7）に大別できる。しかし、同形式の中でも微妙に異なった形状を呈しており強いて同形を擧げるなら2と8くらいであろう。

1は唯一の完形品で、片丸造鑿箭式である。鋭いきっ先を持った厚めの刃部が直線的にすばり、断面正方形の範被につながっている。範被と身の明確な区別はないが、矢柄に装着した際の繊維が残存する。身部長2.5cm、身部最大幅1.0cm、全長13.4cmを測る。

2・8・9は片丸造か両丸造かが明確でない鑿箭式である。身部と範被の間に段を持つ。

2は身部長3.1cm、刃部最大幅1.1cm、9は刃部最大幅1.2cmを測る。

3は片丸造鑿箭式である。身部と範被は緩やかにつながっており、身部最大幅1.0cmを測る。

4は平造三角形式と思われ、浅く撫抶が入っている。身部最大幅1.7cmを測る。

5はやや片丸造の五角形式である。比較的厚みがあり、きっ先の直線的な先頭部が、角度を持って直線に移行し、彎曲して範被へつながっている。身部長5.4cm、身部最大幅2.9cmを測る。

6は平造圭頭広根斧箭式である。全体的に丸味を帯びた形状を呈し、身部は彎曲して範被へつながっている。身部長5.8cm、身部最大幅2.9cmを測る。

7は平造方頭広根斧箭式である。方頭部の角はやや丸味を帯びており、それに続く直線部は内側に彎曲している。身部は緩やかに彎曲して細い範被へと続く。身部長4.9cm、身部最大幅2.6cmを測る。

身部を欠損する破片は8点出土した。ほとんどが範被と茎の境のないものだったが、境のあるもの（11、17）も見られた。矢柄に装着した際の繊維が錆着して残っているもの（12、17）や、木質が錆着して残っているもの（17）も観察された。

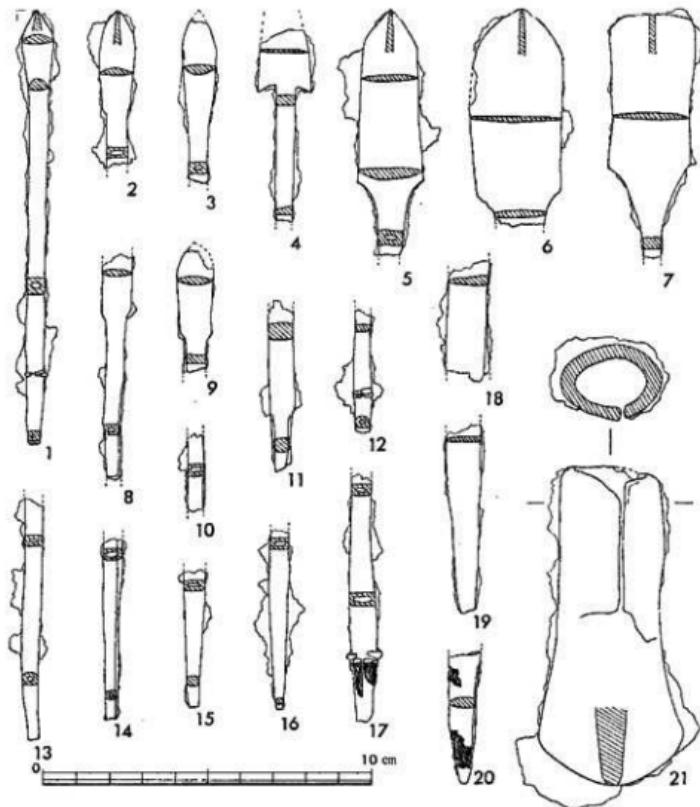
刀子片（18～20）はいずれも小片である。

18は刃部片で、断面が二等辺三角形を呈しており刃がついている。刃部幅1.3cmを測る。

19は茎とそれに続く刃部の一端と思われる。刃部幅1.1cmを測る。

20は茎で、断面は丸味を帯びた二等辺三角形を呈している。木質が残っている。

小型斧(21)は両側から折り曲げて作られた隋円形の袋部を持ち、段を経ずに刃部へ移行するものである。刃部は緩やかな弧を描いており、きっ先はあまり鋭くない。全長9.9cm、刃部幅4.5cm、袋部径は外側で 3.1×2.4 cm、内部では 2.2×1.6 cmを測る。



第18図 鉄器実測図

耳環

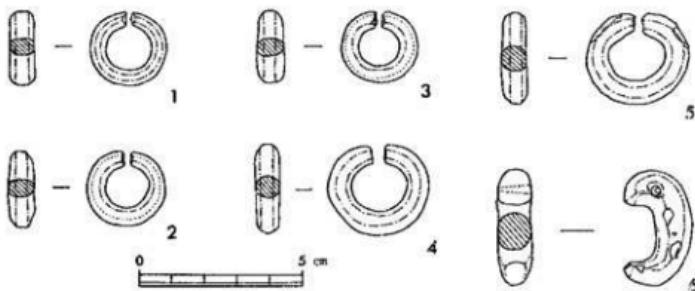
耳環は5点出土した。全て青銅製で、表面に金めっきが施されたもの3点（第19図1・2・3）と、剥離のため表面の金属が不明のもの2点（4・5）である。1・2・3の輪郭は正円形に近く、断面は隋円形を呈している。4・5の輪郭はやや大きめの横に広い隋円形で、断面は正円形を呈している。そのめっき状態・大きさから、2と3、4と5の2セットが考えられる。法量は第7表を参照されたい。

	表面の金属	外径(cm)	内径(cm)	断面径(cm)	切れ目間隔(cm)
1	金が全体的に薄く残存	24×22.5	1.4×1.4	0.8×0.5	0.15~0.2
2	金が内側と外側にのみ薄く残存	24.5×2.3	1.4×1.3	0.8×0.6	0.18×0.2
3	"	23.5×2.2	1.25×1.2	0.85×0.6	0.2
4	全てはく離	31×27.5	1.7×1.5	0.75×0.7	0.35×0.4
5	"	32×2.8	1.7×1.5	0.8×0.8	0.25~0.3

第7表 耳環観察表

勾玉

勾玉は1点出土した。赤めのう製で、薄い赤茶色を呈している。輪郭は丸味を帯びたコの字形に近い。穿孔は一方からのみであるが、反対側には割れ防止の浅いえぐりが施されている。法量としては、全体形が3.52×21cm内におさまり、中央部断面は隋円形で1.2×10.5cmを測る。孔径は穿孔側が3.5mm、反対側が1.5mm、えぐり径は7×6mmを測る。



第19図 耳環・勾玉実測図

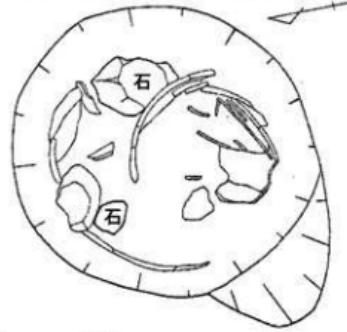
石室外出土遺物について

弥生式土器

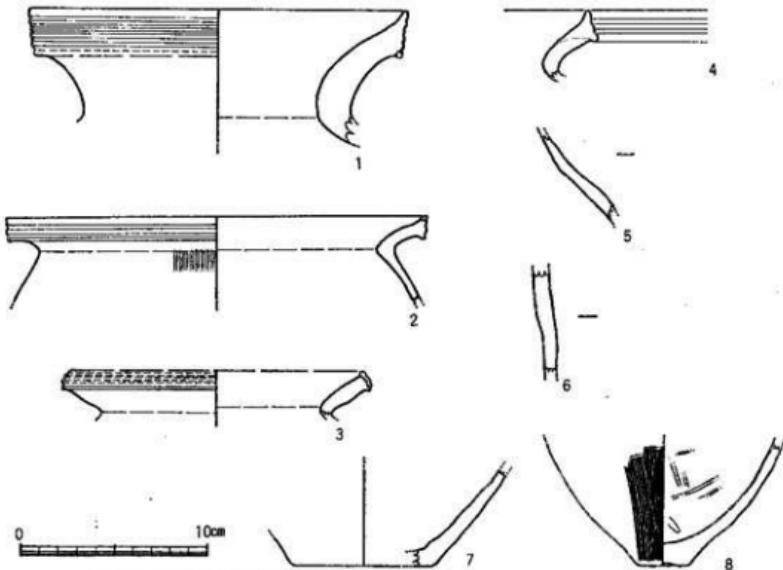
出土状況（第20図）

墳丘下地山面を掘り込んだ、直徑48cm、深さ65cmのすんどうなビットから、多数の弥生式土器が出土した。ビット内は、ところどころに炭片が混じった棕褐色砂質土が入り上から下まで壺や壺が詰まっていた。ほぼ完形で埋まっているものもあれば、同一口縁の破片が最上部と最下部に分かれて埋まっているものもあって、その状況に何ら秩序は見出せなかった。

これらの土器は、器壁が薄いうえ風化が著しく、かなり水分を含んでいた。慎重な作業を行ったにもかかわらず、取り上げることができたのは全体0の約半分であった。



第20図 弥生式土器出土状況図



第21図 弥生式土器実測図

弥生式土器

器種としては、壺と甕がある。いずれも、口縁端部を巡る何条かの沈線とプロボーションから、後期中葉頃に比定すると思われる。

個体別の観察は第8表を参照されたい。

器種	胎 土	焼成	色 調	法量 (cm)	調 整	備 考
1 壺	1~2 mm の石英粒多	並	明褐色	口径 20.5	外面へラ磨き、口縁端部に 5 条の沈線	6.7 と同一個体か
2 甕	0.5~1 mm の石英粒多	悪い	内外面褐色 断面黒色	口径 22.6	口縁延長ナデ、口縁端部に 2 条の沈線	
3 甕	0.5 mm の石英粒多	悪い	赤褐色	口径 16.5	風化のため不明	8 と同一個体か
4 甕	1 mm 程度 石英粒多	良い	明褐色		ナデ、口縁端部に 2 条の沈線	
5 壺		悪い	赤褐色		刺突文	
6 甕		並	黄土色		外面へラ磨き、波状文	
7 壺		並	黄土色		外面へラ磨き	1.6 と同一個体か
8 甕		並	赤褐色		外面ハケメ	3 と同一個体か

第8表 弥生式土器観察表

(番号は第21図の番号に該当する)

石器

出土状況

砥石 1 点、磨石 3 点、石皿 2 点が出土した。

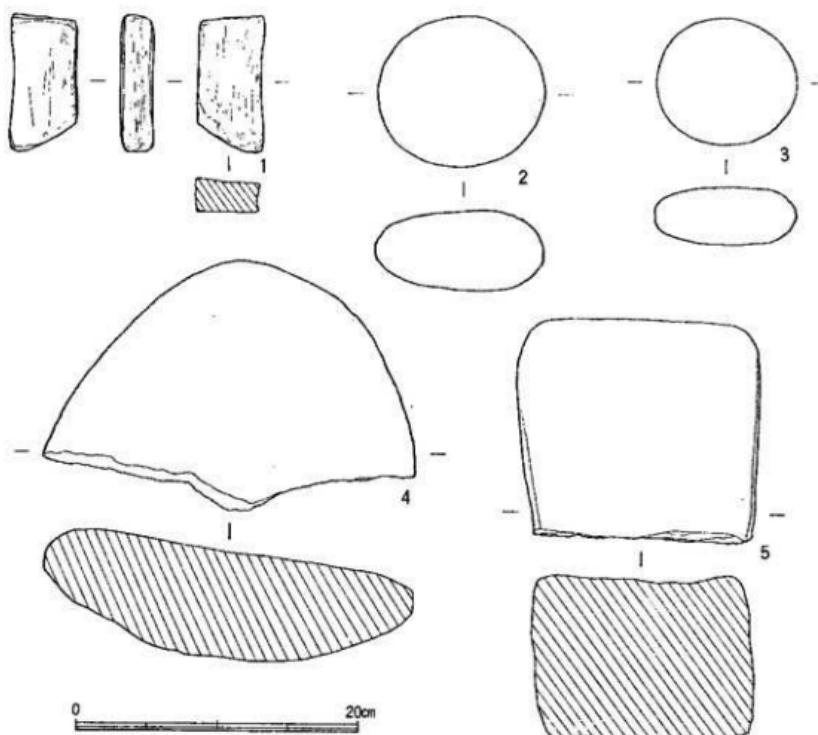
砥石(1)、磨石(3)、石皿(5)の出土状況は、第6図を参照されたい。全て墳丘下土塙底面の地山直上から出土しており、当時の状況を保っていると思われる。位置関係から判断して磨石(3)と石皿(5)はペアで使用された可能性が高い。磨石(2)は残丘上面から表採されたものである。4 はピット内に、その平坦面を下に向けて斜めに落ち込んでいた。

石器

品名	石 材	色 調	法 量 (cm)	備 考
1 砥石	粘板岩	薄 紫	縦 9.6 × 横 4.5 × 厚 1.9	使用痕が著しい。上部のみ自然面が残るが、あとは全て凹面となっている。
2 磨石	花崗岩	白に灰の斑	長径 11.8 × 短径 10.3、最大厚 6.0	
3 磨石	"	"	長径 10.0 × 短径 8.9、最大厚 4.0	5 とペアか?
4 石皿	"	"	残存部最大径 26.3、最大厚 7.6	約半分を欠損
5 石皿	"	"	最大幅 16.5、最大厚 11.7	約半分 (?) を欠損

第9表 石器観察表

(番号は第22図の番号に該当する)



第22図 石器実測図

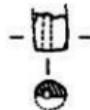
管玉

出土状況

管玉片 1 点が埴丘下土壤底面の地山直上から出土した。
先に挙げた砥石・磨石・石皿（第22図 1・3・5）と同レ
ベルで、同時期と思われる。

管玉

小片ではほとんどを欠損し長さは不明であるが、断面は復
原すると径 0.5cm の円形になると思われる。孔は穿った側
で 0.2cm を測り、1 対 2 の割合で端に寄っている。石材は不明だが、明緑色を呈している。



第23図 管玉実測図

小 結

周布平野を一望に見渡す標高約40mの丘陵上に立地した森ヶ曾根古墳は、後世の畠地化のため墳丘のほとんどが削平され石室も半壊状態にされて現在に至っていた。

今回発掘調査を実施したところ、本古墳は直径約10mを測る円墳で、南～西方向において幅約1mの周溝が残存していることが確認できた。

内部主体は東向きの横穴式石室である。南西に高く北東に低い地山面上に、ある程度の盛り土を施した後、掘り方を掘り石材を据えて築造したと考えられる。石室平面形は袖石を持たない無袖型であるが、入口から2つめに当たると推測される右側石1つがやや角度を持って内傾してすばままでおり、袖石的要素を感じられる。これは片袖型から無袖型へと移行する過渡期的様相を示す形とも考えられる。周囲の後期古墳に類例を探してみたが現時点では本古墳のみであった。とりあえずここでは左片袖型が退化した無袖型横穴式石室であると表現しておきたい。

石室の中からは、須恵器・土師器・鉄鏡・鉄刀子片・鉄斧・耳環・勾玉と多数の遺物が出土した。

特に須恵器の数は38点以上と豊富で、しかも多型式のものが見られた。陶邑編年で表現するとⅡ型式2段階からⅣ型式1段階のもの迄が確認できた。それらの出土状況は、大部分が入口附近左側石側にひとかたまりに寄せ集められており、蓋坏などはその中で丁寧に積み重ねられた状態であった。古い型式のものはほど下方に位置し、新しい型式のものはほど上方に位置していた。數度の追葬の存在は、須恵器の型式面と出土状況面の両面から明らかであった。

さて、その他の出土遺物だが、各種鉄製品・耳環・勾玉は後期古墳の典型的な副葬品と言える。特に耳環は、日脚遺跡内の4基の古墳のうち石室残存状況が比較的良好な3基の古墳から出土しており、この地域でも最も典型的な副葬品と考えられる。

ただ、赤めのう製の勾玉は先の4古墳からも出土しておらず、現時点では周布平野周辺では唯一の出土例となっている。周辺地域を見渡すと益田市の鶴ノ鼻古墳群において多数の出土例が数えられることは興味深い。しかし、Ⅰ章でも述べたように周布平野周辺の古墳で正式な調査が行われたのは、日脚遺跡内の4基の古墳のみである。現段階で地方色を論じようすることには多少の無理が感じられるため、今回は資料显示のみにとどめておきたい。

古墳関係以外の遺構として、墳丘下からピット5つと土壙1つが検出された。この土壙は出土遺物から住居址である可能性が高いが、柱穴が見あたらないため、はっきりとした断定は避けておきたい。また、ピットの1つからは弥生時代後期の土器が多量に出土し、弥生時代の遺跡も周辺に埋まっていると考えられる。

A地区周辺は、古くは弥生時代後期からそして現在に至るまで、何らかの形で人間の足跡を残してきたようである。すぐ下の沢は絶え間なく清水が流れしており、人間の生活にとっては非常に好都合な場所でもあったのであろう。

V B地区

調査概要

B地区は森ヶ曾根古墳の南東方向で約3~8m下った地点である。かなり勾配の急な斜面上だが、森ヶ曾根古墳の石室石材と同じ花崗岩の集石が見られたため調査を実施した。

まず集石を中心にして、等高線とほぼ直角の方向で、上下10m（平面距離）×横1.5mのトレンチを設定した。また、1m離して平行に上下8.8m（平面距離）×横0.5mのトレンチも設定した。

トレンチの上部はかっての畠地の痕跡を残しており、小崖が観察できた。土層は、その小崖附近では上より腐食土（第25図1）、赤色砂質土（2）、橙色砂質土（3）、白橙色砂質土（4）の4層が確認された。いずれの層からも須恵器小破片が出土している。集石中央部周辺では2と3の2層が確認された。地山面には特に変化はないが、集石中心部に入る直前に約30cmの落ち込みがあり、段がついていた。集石の石は、地山面にやや埋まっているものと浮いているものの両方が見られた。集石部下方では、上より（1）灰色砂質土（5）の2層が確認された。下方の地山面は上方と違って軟質の小石をかなり密に含んでおり、それが上層にも少々混じっていた。

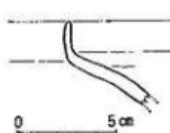
C地区と並行して昭和60年4月27日～5月5日迄、実質8日間調査を実施したが、遺構は検出できなかった。集石の性格は明確ではないが、その中に石室の天井石や側石に利用できそうなものもかなり含まれていたため、森ヶ曾根古墳を破壊した際に石材を投げ捨てた場所ではないだろうか。また、須恵器の小破片が10数点出土しているが、それも森ヶ曾根古墳から転落したものと考えられる。

遺物

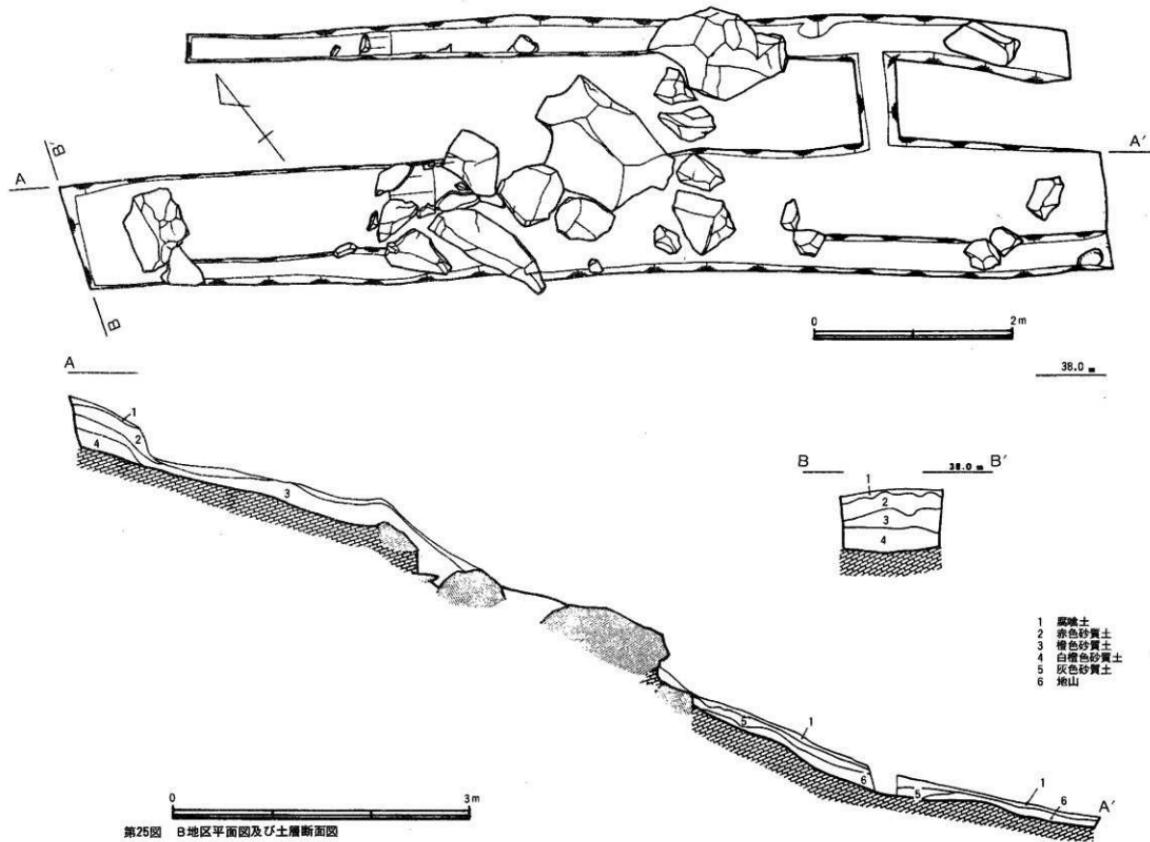
須恵器小破片が10数点出土しているが、器種が確認できるものは第24図に示した短頸瓶のみであった。

これは、0.5m幅トレンチのはば中央部腐食土中から出土したものである。胎土は石英微粒を多く含み、

焼成は良好、色調は内・外・断面とも茶褐色で、調整は内・外面ともナデによる。



第24図 B地区出土須恵器実測図



第25図 B地区平面図及び土層断面図

VI C地区

調査概要

C地区は森ヶ曾根古墳の南方向で約6～9m下がった地点である。その発掘前状況はB地区と近似しており、かなり勾配が急な斜面上に森ヶ曾根古墳の石室石材と同じ花崗岩の集石が見られたため、発掘調査を実施した。

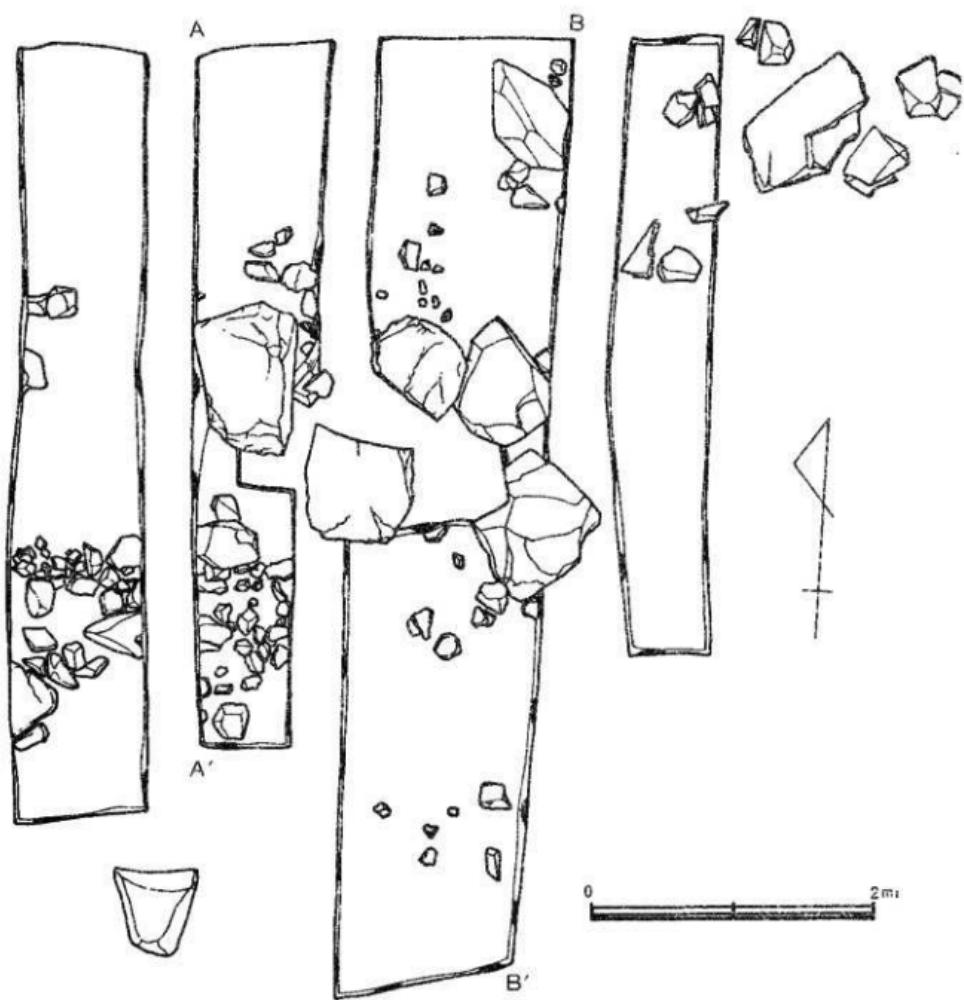
集石を中心にして、等高線とはほぼ直角の方向で、西から上下5m×横1m、0.5m離して上下4.5m×横1m、0.5m離して上下6m×横1.5m、0.5m離して上下4m×横0.8mと言う4本のトレンチを設定した。土層を観察しながら掘り込みを行ったが、巨石周辺は危険であるため土を残すことにした。

その結果、巨石は地山面からやや浮いているものが多く、埋まっているものもその重量によるためと思われ、埋まった部分は極浅いであろうと判断された。なお、第26図の左下に見られる小石の集石は地山の中に含まれているものであった。これらは非常に軟質で、B地区の左下で検出された地山中の小石と同じものと思われる。

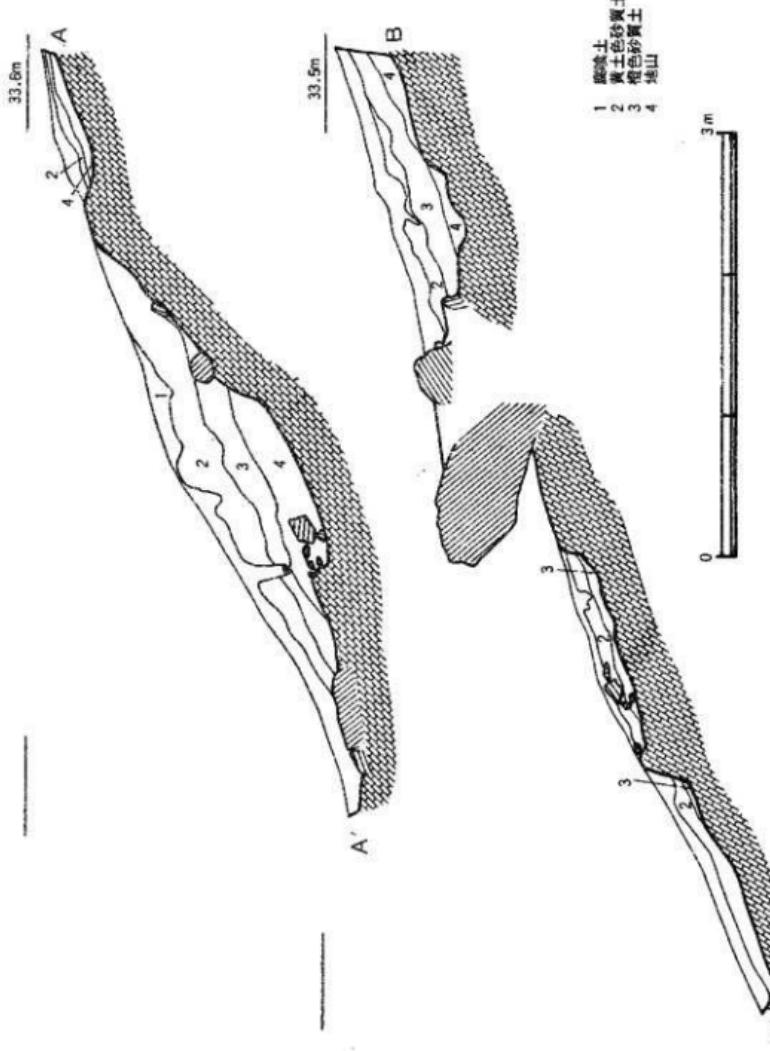
土層は第27図A-A'トレントで、上より腐食土層①、黄土色砂質土②、橙色砂質土③の3層が観察された。

遺構・遺物は検出できなかった。

調査はB地区と並行して昭和60年4月27日～5月5日迄、実質8日間実施したが、巨石の集石の性格を明らかにするには至らなかった。



第26図 C地区平面図



第27图 C地区土壤断面图

VII D地区

調査概要

D地区は森ヶ曾根古墳の西方約50mの地点である。丘陵上の平坦地で、巨石の集まりが見られたため発掘調査を実施した。

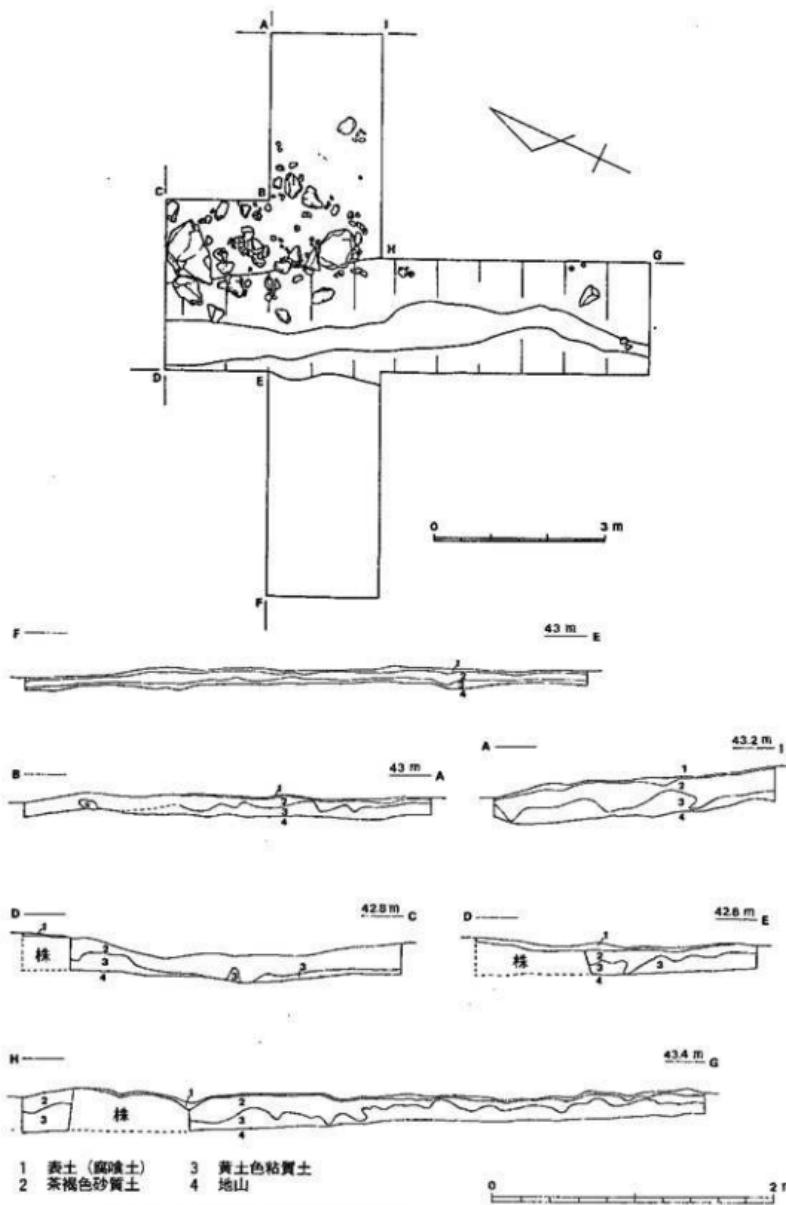
まず、集石部を中心にして南西方向に長い2m×10mのトレンチを設定した。掘り進むと北よりの位置を中心に大小多数の石が出土したため、北方へ幅2mのトレンチを3m延ばした。しかし、一部を除いて出土した石のはほとんどは浮き石もしくは地山面に含まれている軟質の小石で、遺構を形成するものではなかった。

また、南北方向にかけて幅約2mの溝状遺構が検出されたため、幅2mのトレンチを南方へ5m延ばした。溝状遺構はそのまま南へ延びていたが、南へ行くほど幅広く浅くなっているようであった。遺物が出土していないので時期は不明である。

土層は全体的に上より腐食土層(第28図1)、茶褐色砂質土層(2)、黄土色粘質土層(3)の3層が観察されたが、何れの層も遺物は含んでいなかった。

調査はE地区と並行して昭和60年2月16日～2月23日迄、実質7日間実施したが、わずかに時期不明の溝状遺構を検出したのみであった。

集石の性格は不明である。土地の人の話によると、昭和初期頃畠地化されたことがあるらしく、その際の石の投げ捨て場とも考えられる。



第28図 D地区平面図及び土層断面図

VIII E 地区

調査概要

E 地区は鷹石遺石のすぐ背後にあたる丘陵上平坦地に位置する。鷹石遺跡との関連遺跡の存在が考えられたため発掘調査を実施した。

まず南北方向に $2\text{m} \times 15\text{m}$ のトレンチを設定し、その北端附近から東に延びる尾根に向けて 2m 幅トレンチを 7m 延ばした。南北トレンチの南端部では集石が見られたため、トレンチを 2m 幅でさらに南へ向けて 2m 延長した。集石は地山面に含まれる軟質の小石がほとんどであったが、海石のような丸石 1 個も混じっていた。また、そのほぼ中央部からは須恵器の破片 1 点が出土した。

周囲の状況を観察すると、小崖の土留めと思われる無造作な石積みが 1 列走っており、ここで検出した集石はその延長線上に位置するようであった。土地の人の話では D 地区同様、昭和初期から戦後にかけて耕作が行われていたそうで、おそらくその遺構であろう。

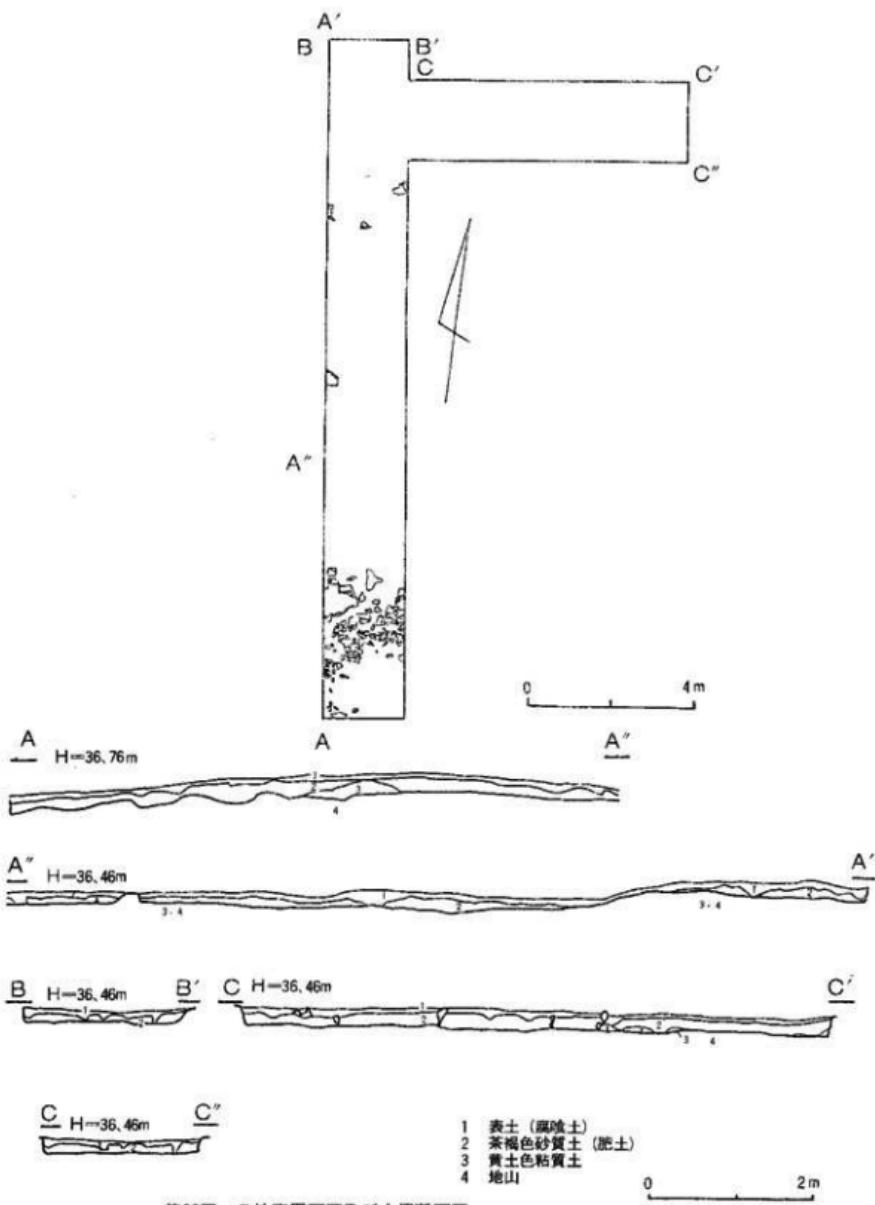
かなり広い面積を発掘したが、他には何ら遺構は検出されなかった。

土層は上より腐食土層（第29図 1）、茶褐色砂質土層（2）の 2 層が観察された。須恵器が出土したのは丁度 1 と 2 の境附近であった。

調査は D 地区と並行して昭和 60 年 2 月 16 日～2 月 23 日迄、実質 7 日間実施した。

遺物

須恵器甕の胴部破片が 1 点出土した。内面は同心円文の叩き目調整が残るが、全体的に風化が著しく、小片であるため詳細は不明である。



第29図 E地区平面図及び土壠断面図





